

Gillian Catriona Ramchand: *Situations and Syntactic Structures*

Cambridge, Massachusetts: MIT Press, 2018. x + 235pp.

本多尚子

1. 導入

本書では、自然言語における統語論や形態論における経験的言語事実の一例として、英語における助動詞間の語順の問題を主に取り上げ、それと適切に結びつけられていくような合成意味論をどのように構築するかという問題、特に、節の埋め込みに関するvPカートグラフィー（EvtP, InitP, ProcP, ResPから構成される）を利用した合成意味論の構築という面に焦点があてられている。Ramchandは、概念一意図体系における意味と統語構造との対応を考える上での意味論の構造化の必要性に言及し、その主張を裏付ける経験的な証拠として、英語における法助動詞や相助動詞の語順の厳格さに関する事実を挙げている。

本書の構成は以下のとおりである。1章では、前半部で、本書の主張と、合成意味論における基本概念及び理論的道具立てについてまとめ、後半部では、本書で取り扱う英語における法助動詞及び相助動詞間の語順の厳格さに関する一般的言語事実を整理した上で、分散形態論や統語論に関し本書が採用する立場や理論的道具立てについても概観している。2章では、英語の進行相を扱い、進行相の助動詞beも-ing分詞も共に、統語的観点から節のFirst PhaseであるとRamchandが仮定するEvtP内に存在し、合成意味論的観点からするとイベント概念構築のドメイン内に存在すると主張する。3、4章では、受動構文や完了構文に現れる英語の-en/ed分詞の解釈と分布について扱い、当該分詞はEvtP内で構築される一方、完了のhave助動詞はイベント変項への存在閉包適応後

に構築されるドメイン，すなわち，時間に関する特性が述べられるようになるドメイン内に生じると主張する。2から4章より，完了相助動詞と進行相助動詞との間の語順が自然に説明される。5，6章では，法助動詞を扱い，特に，義務的モダリティの解釈と認識様態モダリティの解釈との間の法の両義性の問題について取り上げる。Ramchandは，法助動詞は統語構造上の異なる高さにおいて機能し，文脈的発話情報などの可能世界における要素とも結びつけられて初めて解釈されるものであると提案する。7章では，本書の議論の出発点である，英語における助動詞の語順の厳格さをどのように理論的に捉えるかという問題に立ち戻り，本書で提案された理論やシステムがどのように自然言語における言語事実を正しく予測するのかを検証していく。紙面の都合上，本稿では特に3章を中心に扱われている受動構文の分析に焦点をあて論じていく。

2. 本書の概要

受動構文は，一般にレキシコン内において形成される形容詞的なものと，統語部門において組み立てられる動詞的なものとに大別され，従来の研究においてはそれぞれ異なる枠組みから捉えられてきた。Ramchandは，こうした見方とは異なり，分散形態論的アプローチを採用し，形容詞的受動態も動詞的受動態も，(1)の共通の統語構造内における異なる高さでの-ed形態素の挿入により，それぞれ生じるものとして分析する。

(1) [EvtP … [Evt' Evt [InitP Init [ProcP Proc [ResP Res XP]]]]]

(* EvtP: Event Phrase, InitP: Initiation Phrase, ProcP: Process Phrase, ResP: Result Phrase)

形容詞的受動分詞の-ed形態素は，Res主要部位置に挿入される一方，動詞的受動分詞の-ed形態素はそれよりも高いProc主要部位置にまず基底生成された後，動詞の種類に応じて当該位置に留まる場合と，より高い位置にあるInit主要部に内的併合する場合が存在する。また，形容詞的受動分詞のclosedが動詞closeの結果状態を暗示するという直観は，形容詞的受動分詞の-ed形態素が，動詞closeに語彙指定されるRes主要部位置に挿入されることから容易に予測さ

れる。

さらに、形容詞的受動態を、Target stativeなもの (The door is closed.) と、Resultant stativeなもの (?The metal is hammered.) とに下位分類し、両者の違いを、受動形態素 -ed が付加する host となる動詞がその語彙指定として Res を含んでいる場合には Target stative participle を含む受動態が、含んでいない場合には文脈より ResP が強制され Resultant stative participle を含む受動態がそれぞれ生じるという形で捉えている。特に後者に関しては、?The metal is hammered. のような文を例に挙げ、その容認可能性が低くなるのは、hammered といった受動分詞は、そのもととなる hammer という動詞が語彙指定として Res を含んでいない活動動詞であり、ResP は文脈からの強制により、あるイベントの結果状態句として特別に容認されるものであるため、stative な解釈とは意味的にそぐわないためであるという理論的説明を与えている。

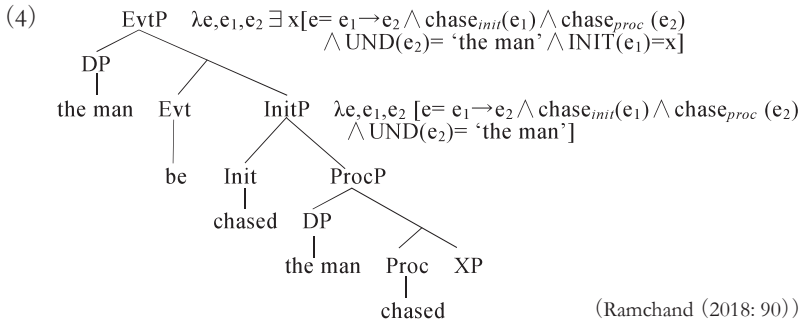
また、受動構文が持つ (2) の典型的な 5 つの特性や、(3) で示されるように、進行相が受動態に先行する語順が英語において強制されるのはなぜかという理由についても (4) の構造を仮定することで説明を与えている。

(2) Central properties of the passive

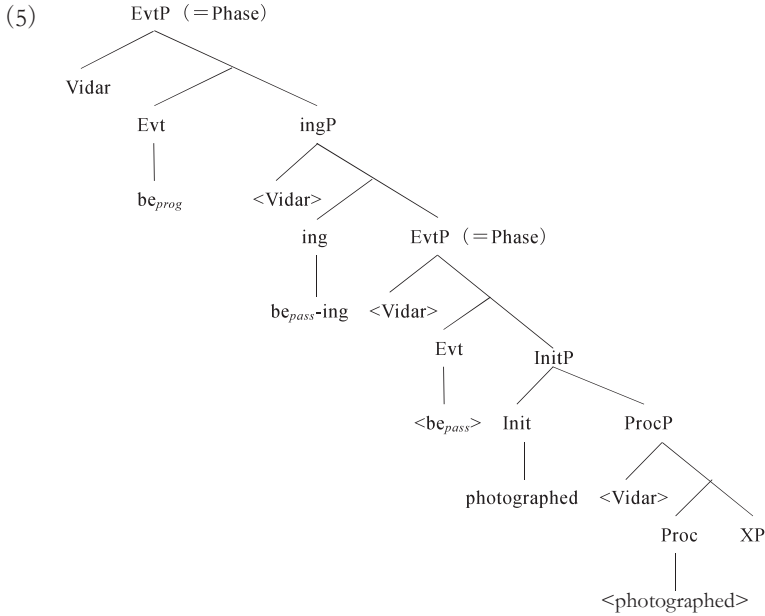
- a. Semantically, the external argument is present but existentially bound.
- b. Verbal aktionsart is preserved.
- c. The participle modifies only the internal argument.
- d. The passive VP lies within the lowest event domain of the clause.
- e. Passive does not occur with unaccusatives in Germanic, or with intransitives more generally in English. (Ramchand (2018: 89))

(3) a. Vidar is being photographed.

- b. *Vidar was been photographing (the cat). (Ramchand (2018: 95))



(2a) に関しては、外項とは、EvtPに対応する形式意味表示内における x であり、 x という人物が実在 ($\exists x$) し、その x は chase を開始するというサブイベント (e_1) における開始者として解釈を束縛されている一方、統語構造上は項として具現していないことから捉えられ、(2b) も activity portion を示す ProcP を含むこと、(2c) も、受動分詞が、限定用法で使用される際に、動詞の内項を修飾できる (The half-eaten apple ...) 一方、外項を修飾できない (*The half-eaten man ... (meaning 'John had half-finished eating')) のは、(4) の構造で chased と統語構造上関連付けられる DP は内項である the man しか存在しないことから捉えられる。(2d) についても、the lowest event domain of the clause とは EvtP フェーズを指しており、Evt 主要部を passive *be* が占めているため、受動分詞は Init 主要部までしか移動できないことから当該要素が EvtP フェーズ内に留まることが自然に説明される。(2e) は (4) の構造から単純には説明されないように思えるが、英語の受動構文においては対格抑制の効果が、ノルウェー語では動作主抑制の効果がそれぞれ重視されていると仮定すると、動作主も対格付与もともと存在しない非対格動詞はどちらの言語でも受動化の対象になり得ない。他方、対格付与はないが、動作主は含んでいる非能格動詞は、その動作主を抑制し項として具現しないことで、受動化の条件として動作主の抑制を重んじるノルウェー語では非能格受動文 (虚辞 + *be* 動詞 + 非能格動詞の受動分詞) が生じる一方、対格の抑制を重んじる英語では当該構文は生じないと正しく予測される。また、(3) の事実に関しては、英語では進行相と受動態を共に含む事例において、(5) のような higher EvtP と lower EvtP からなる統語構造を持つと仮定し記述を試みている。



Higher EvtPは Asp 素性と関連付けられる句であり、その主要部 Evtは be_{prog} が占めている。-ingPは higher Evt 主要部の be_{prog} に補部として選択される。そのため、-ing形態素は lower EvtP より構造的に高い位置にある ingP の主要部位置で併合する。他方、-ed 形態素は lower EvtP の Evt 主要部位置を be_{pass} の空のコピー（もう一つのコピーは ing 主要部へと移動し、-ing 形態素と併合）が占めているため、より低い Init 主要部位置までしか移動できず、進行相が受動態に先行する語順のみが生じるとされている。

3. 本書の貢献と残された課題・展望

本書は、合成意味論と、形態論及び統語論との対応を捉える仕組みの理論的実装と、そこで提案されるしくみが自然言語における言語事実をいかに適切に捉えることができるかを、英語における助動詞の語順という一般的にもよく知られた言語事実を用い明確に立証しているという点で理論的にも経験的にも非

常に意義深い。特に、受動構文に関しては、形容詞的受動態と動詞的受動態とを統一的な理論により捉えようとしている他、受動分詞を、それに含まれている動詞の意味に基づき下位分類した上で言語事実について綿密に記述し理論構築を試みる等、受動態に関する統語的あるいは意味的分析を行う研究者にとって重要な貢献を成すものとして評価に値する。他のゲルマン諸語にはあまり見られない英語の特質である助動詞間の厳格な語順制限や非能格受動態に関する制限を統一的に説明する可能性を開いたことは今後の英語学研究の発展に大いに寄与すると考えられる。

他方、今後の研究課題も残されている。Ramchand自身も述べているが、一部事例において見られる語用論的制限をどのように扱うかについては本書では議論がなされていない。

本書で提案された分析は、合成意味論はもちろん生成統語論や分散形態論に関する研究にも一石を投じ、今後の関連研究のさらなる発展に繋がる可能性を十分に秘めている。生成統語論及び統語と意味のインターフェイスに関心のある研究者はもちろん、当該分野に関心を持つ大学院生等にもお勧めする良書である。